

〈文〉をとおして人間を知る。〈文〉のちからで世界を変える。

上智大学文学部は、〈文〉を研究することによって人間性を探求するとともに人間性を高める学問の場です。
2000人余りの学生が7つの学科で哲学、歴史、文学、ジャーナリズムなどを研究しています。

哲学科

それぞれの社会、それぞれの時代で「時代精神」があります。それは時代と社会の雰囲気であり、またそこでの思考規則でもあります。現代のその一つは「真理以後」(Post-truth) だと言われます。哲学科では、学生と教員でテキストを読んで議論しながら、そんな時代にも妥当する理性的な思考のあり方を探求しています。

史学科

上智大学文学部史学科では、様々な時代・地域の歴史と文化を多角的に考察し、民俗学などの隣接分野の知見も深めながら学びます。多彩な教授陣と豊富なカリキュラムで、学問に対する好奇心を広げ、国際的な視点を養い、学芸員や教員をはじめ幅広いキャリアに繋がる学びを得られる学科です。

国文学科

日本の言語と文学について、古代から近代まで全ての時代にわたり、また語学と文学とを関連付けながら、さらには中国・欧米などの影響も視野に入れ、幅広く総合的に学んでいきます。そして、4年次には、自らテーマを決めて本格的な学術論文を作成し、混沌とした現代だからこそ必要となる合理的・実証的な思考と表現を実践的に身につけます。

英文学科

日英両語のプロとして多元的な国際社会の発展に貢献する人物を養成する学科です。学生は、多彩な語学クラスでの基礎力の習得から、3専門領域から1つを選び専門性を獲得するまでの4年間に、留学や教職課程等の各種プログラムを自由に組み入れ、過去と現在、書物と現実、理論と実践の間を往還して、国際人としての人格を陶冶します。

ドイツ文学科

ドイツ語圏には膨大な時間をかけて蓄積された〈知〉のデータベースがあります。本学科では、①読む・書く・話すの実践的なドイツ語力を身に着けること、②ドイツ語文化圏の言語芸術・表象芸術の魅力と背景を探究することを通して、ドイツ語圏の〈知〉にアクセスし、現代社会の諸問題を歴史的・複眼的に捉える柔軟な思考法を身に付けていきます。

フランス文学科

本学科では、フランス文学、美術、映画、演劇、思想、社会に関する研究を通して思考力・分析力を養います。そのためにもまずフランス語を集中的に学び、文献収集と読解の方法を身につけます。最終的には自ら選択したテーマで卒業論文を執筆し、「分析する・対象と対話しつつ考える・思索的に書く」という、社会においても重要な力を磨きます。

新聞学科

本学科では、新聞、放送、出版、映画、広告などのマス・メディアはもとより、インターネットやソーシャルメディアをはじめとするデジタル・メディアを含むメディア・コミュニケーションの領域を対象に、それらが社会においてどのような役割を担い、どのように機能し、どんな影響を与えているのかを『理論と実践』の両面から学びます。

文学部の知の広さと深さを
実感する創造的な学びの場

文学部横断型人文学プログラム

上智大学文学部では「文学部横断型人文学プログラム」を開講しています。「横断型」と銘打っているのは、学科の枠を超えて履修できる学部共通のプログラムだから。自学科の専門に縛られることなく、他学科の学生・教員とともに学び、人文学の興味の幅を広げてみたい!という学生におすすめです。意欲を持った学生の参加を期待しています。
横断型プログラムには「身体・スポーツ文化論コース」「芸術文化論コース」「ジャパノロジー・コース」の3コースがあり、各コースともに魅力的で多彩な科目を描えています。

身体・スポーツ文化論

身体は文字をもたないテキストです。身体に刻まれた個人の記憶や感情、そして歴史や社会、文化のテキストを読み解くのはあなた自身です。キーワードは「エンボディメント embodiment」。身心論をはじめ、舞踊、スポーツなど多様な身体文化論をとおして、自身の研究テーマに潜在する身体性を探求していきましょう。

芸術文化論

芸術文化は、文学部での学びと密接に関わるものです。このコースでは美術・音楽、舞台芸術、造形芸術(ファッション等)、視覚芸術(映画やゲーム等)、アーカイブズ(作品の保存)など、多彩な内容を学びます。そして、プロジェクト・ゼミではそれらの内から任意のテーマを選び、自分なりの研究成果を目指します。

ジャパノロジー

最近、主にネット上で、日本を礼賛する言説をよく見かけます。それに「本当かな」と違和感を覚えたことはありませんか。各種のメディアに見られる、自画自賛的でステレオタイプの日本像からこぼれ落ちてしまうものにこそ、本当に豊かな魅力、重要な問題が隠れているはず。本コースでは、内外を往還する視野から、受講者それぞれが新しい〈日本〉を再発見することを目指します。

詳しくは《文学部オリジナルサイト》へ。 ▶▶▶ <https://fh.sophia.ac.jp/>

文学部 HP▶



上智大学

文学部

Faculty of
Humanities



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

〈文〉をとおして人間を知る。

〈文〉のちからで世界を変える。

● 哲学科

● 史学科

● 国文学科

● 英文学科

● ドイツ文学科

● フランス文学科

● 新聞学科

撮影：アムステルダム国立美術館研究図書館

French Literature



哲学科 3年

大山 陶子
TOKORO YAMA

対話を通して
深まる哲学の学び

1. 学科を選んだきっかけ

もともと人と話すことが好きで、高校の倫理の授業で「哲学対話」に出会ったことがきっかけです。「優しさとは何か」というテーマについて円になって話し合う中で、自分とはまったく異なる考え方に触れ、「人はこんなにも違うことを考えるのか」と実感しました。その面白さに惹かれたことをきっかけに、日常的な問いについて深く考えることが楽しく感じられるようになりました。哲学を学びたいと思って哲学科を選びました。

2. うちの学科のここがスゴイ！

哲学科の魅力は、先生との距離が近く、対話がしやすい環境にあることです。学科の人数が比較的小さいため、授業後に気軽に質問したり、研究や卒論について相談したりすることが出来ます。

また、先生ごとに専門分野が異なるため、同じ問いについてもさまざまな立場から意見をもらえるのが特徴です。一つの問いに対して複数の視点から考えを深めていける環境が整っていると感じています。実際に、同じテーマについて列の先生に相談すると、まったく異なるアプローチや考え方を提示してもらえることもあり、「一つの問いには一つの答えしかないわけではない」ということを日常的に実感できる環境だと思います。

3. 学びを通して自分の中に起こった変化

自分の考えを言葉にして説明することの難しさや面白さを実感したことが大きな変化です。哲学の授業では、自分の考えを発表してまとめる機会が多

く、その過程で「自分は何を考えているのか」「どこがまだ曖昧なのか」がはっきりと見えてきます。

また、大学では自分から学びに行く姿勢が大切だということも学びました。特に哲学科では、先生に相談すればすぐに応答してもらえる環境があるため、自分から積極的に問いを持ち、対話を通して理解を深めていくことの重要性を感じています。

4. 学びを今後の人生の中でどう活かす？

哲学を学ぶ中で、「自分はどう生きたいのか」を考える機会が増えました。すぐに答えが出るものではありませんが、考え続けることが自体に意味があると感じています。

また、哲学の学びを通して、一つの問題に対してすぐに結論を出すのではなく、立ち止まって考え続ける姿勢が身に付いたと感じています。これは将来どのような進路に進んだとしても、重要な力になると考えています。

今後は大学院への進学も考えていますが、その先の進路に関わらず、自分の考えを軸にして選択していく姿勢を大切にしていきたいです。哲学で身につけた「問い続ける力」を、これから人生の中でも活かしていきたいと考えています。

フランス文学科 4年

桑原 希奈
NONA KUMAHARA



表現を学ぶ、
もうひとつのかたち

1. 学科を選んだきっかけ

もともと英語以外の外国語を学んでみたいと思っていた、その中でフランスに興味を持ったのは、幼い頃から続けているモダンバレエがきっかけです。バレエを通してフランスの文化に触れる機会が多く、高校では美術や演劇にも関心を持つようになりました。そうした経験がきっかけで、「フランスの文化や文学をもっと深く知りたい」と思い、フランス文学科を選びました。フランス語を学んで、いつか原文で作品を読めるようになったらいいなという思いもありました。

2. うちの学科のここがスゴイ！

一番感じているのは、先生との距離の近さです。特に1年生のフランス語の授業は少人数なので、分からないところをそのままにせず、その場で質問できる安心感があります。語学は積み重ねが大事なので、この環境はすくなくないと感じています。

また、毎年行われるクリスマス会では、先生や他学年の学生と気軽に話しかけられて、普段の授業とは違う形でつながりが広がるのも魅力です。「学科全体で学んでいる」という実感が持てるところが、この学科の好きなところですね。

3. 学びを通して自分の中に起こった変化

自分と同じ作品を見て、人によってまったく違う感じ方をすると、ということに気づいたのが一番大きな変化です。舞台芸術論の授業では、バレエやオペラを鑑賞したあとに意見を出し合うのですが、「同じ場面でもそんなふうに見えるんだ」と驚くことが何度もありました。

例えば、自分が感動した場面でも、別の人には全く違うポイントに注目していたり、逆にあまり印象に残らなかったという意見が出たりすることがあり、そこに解釈の幅の広さを感じました。

それまでは自分の感じ方が自然だと思っていたのですが、今は「違う見方があって当たり前」と思えるようになり、人の意見を聞くことが前より楽しくなりました。

4. 学びを今後の人生の中でどう活かす？

大学での学びを通して「人はそれぞれ違う考えを持っている」ということを実感したので、それをこれからの人間関係やコミュニケーションに活かしていきたいです。相手が自分と違う考えを持っていることを前提に向き合えるようにしたいと思っています。

また、バレエに対する見方も変わりました。授業でプロのダンサーの舞台を観たとき、動きだけでなく表情で感情を伝えていることに気づきました。自分も長くバレエを続けていますが、これまでではそこまで意識できていなかった部分なので、これからは「どう見えているか」を考えながら踊れるようになっていこうと思っています。



史学科 4年

與田 茉莉阿
MARIA YODA

「覚える歴史」から
「考える歴史」へ

1. 学科を選んだきっかけ

もともと英語を勉強する中で、語源をたどることが好きで、言語にも歴史にも興味がありました。ただ、どちらに進むべきか迷っていた時期もありました。そんなときに高校の先生に相談したところ、「言語にも歴史にも関心があるなら、史学科でその両方を活かせるよ」と勧めてもらい、史学科を志望しました。得意だった世界史を軸にしながら、自分の興味を広げていけそうだと感じたのが決め手です。

2. うちの学科のここがスゴイ！

入学前は「歴史が好きならばかりで、自分はついていけないのかな」と不安もありました。でも実際に学んでみると、知識量よりも「どう考えるか」が重視される授業が多く、いわゆる暗記中心の歴史とは違う面白さがあると感じました。

特に印象的だったのは、同じ出来事について資料の読み方や前提の置き方によって結論が変わることです。単に事実を覚えるのではなく、「なぜそう解釈できるの」を考えることが求められる点に、これまでの違いを強く感じました。

また、史学科では1年生の段階から自分の専門以外の地域や時代幅広く学ぶ仕組みになっていて、さまざまな分野に触れながら歴史学全体の考え方を身につけることができます。特定の分野に早くから絞るのではなく、広く学べるところが大きな魅力だと思います。

3. 学びを通して自分の中に起こった変化

一番大きな変化は、「歴史には一つの正解しかない

- 1. 学科を選んだきっかけは何ですか？
- 2. うちの学科のここがスゴイ！と思うところはどこですか？
- 3. 学びを通して自分の中に起こった変化はありますか？
- 4. 学びを今後の人生の中でどう活かしていきたいですか？



英文学科 3年

橋下 空良
SORAHASHI AKI

新しいことに
挑戦できる自分へ

1. 学科を選んだきっかけ

中学生の頃から英語が好きだと感じていて、高校で学ぶ中でその興味がより具体的にになりました。単に「英語が好き」というだけでなく、接頭語や接尾語の発音といった言語学的な分野に強く惹かれるようになったことが大きなきっかけです。

一時期、他学部も考えていたのですが、大学生活という限られた時間を「本当に興味のあることに使いたい」と思い直し、最終的に英文学科を選びました。自分の関心に正直に進路を決めたことが、今の学びにつながっていると感じています。

2. うちの学科のここがスゴイ！

英文学科の魅力は、英語をさまざまな視点から学べる点です。授業ごとにアプローチが大きく異なり、同じ「英語」でもまったく違う面白さに出会えます。

例えば、文章を行単位で細かく読み解き、注釈まで丁寧に確認していく授業もあれば、作品の中の描写やモチーフが何を意味しているのかを考える授業もあります。さらに、古英語を扱う授業など、高校までの「受験英語」とは大きく異なる内容にも触れることができます。

また、学科の人数構成の特徴もあって、学生同士の距離が近く、自然と顔見知りが増えていく環境も魅力の一つです。授業だけでなく、人とのつながりの中でも学びが広がっていると感じています。

3. 学びを通して自分の中に起こった変化

一番大きな変化は、「試しにやってみよう」という考え方が身に付いたことです。入学当初は、新しい

わけではない」と気づいたことです。中学・高校では教科書に書かれている内容がそのまま正しいものとして扱われていたが、大学では同じ出来事でも研究者によって異なる解釈があることを学びました。

その経験から、物事を一つの視点だけでなく捉えるのではなく、「別の見方もあるのではないか」と考えるようになりました。歴史に限らず、日常の出来事や社会の問題についても、背景や文脈を意識して多角的に見る癖がついたと感じています。

4. 学びを今後の人生の中でどう活かす？

現在は教員を目指して教職課程を履修しており、史学科で学んだ歴史の知識や考え方を将来に活かしていきたいと考えています。

それに加えて、卒業論文の執筆を通して「自分はなにに興味があるのか」「なぜそれに惹かれるのか」といったことを深く考える時間が増え、自分自身と向き合う力が身についたと感じています。

今後は、周りの情報に流されるのではなく、「自分が何をしたいのか」を考え続けることを大切にしていきたいです。史学科での学びは、そうした自分の軸を持つための土台になっていると感じています。



新聞学科 3年

川上 凜奈
RINA KAKAMI

理論と実践で学ぶ
メディアの世界

1. 学科を選んだきっかけ

高校生のときに、アメリカの MeToo 運動を扱った映画を観たことがきっかけです。ニューヨーク・タイムズの女性記者が社会問題を告発した姿を見て、「まだ見えていない問題を、記者として社会に伝えたいな」と思うようになりました。

そこからメディアについて学べる学科を探中で、上智大学の新聞学科は、実際に記事を書いたり映像を制作したりといった実践的な授業が充実していること、さらに現場で活躍していた記者の方から直接指導を受けられる点に魅力を感じ、志望しました。

2. うちの学科のここがスゴイ！

新聞学科の特徴は、「理論と実践の両方を同時に学べる」点です。新聞学科という、「新聞について学ぶ学科」というイメージを持たれていたことも多いのですが、実際にテレビ制作や広告、出版など、さまざまなメディアについて幅広く学ぶことができます。

例えば、1年生の必修でテレビ制作の授業があり、校内のスタジオで実際に1分間の番組を撮影します。文章を書く授業では、現場経験のある先生から直接添削を受けることができ、短時間でテーマに沿った文章を書く訓練を積むことができます。

さらに、メディアの歴史や出版業界の構造など、背景となる知識もしっかり学ぶことができたのが、単なる技術だけでなく、「どのメディアをどう使うのが効果的か」という視点も身に付きました。実践と理論が結びついている点が、この学科の大きな強みだと感じています。

3. 学びを通して自分の中に起こった変化

大きな変化の一つは、行動力が身についたことです。授業で学ぶだけでなく、外部のメディアに関わる活動にも積極的に参加するようになり、学生新聞のライターや広告制作、出版社でのアルバイトなど、さまざまな経験に挑戦してきました。周囲にも同じように外部で活動している学生が多く、そうした環境にいることで「まずやってみよう」という姿勢が自然と身につけていきました。

また、メディアの捉え方も変わりました。入学当初は「記者になりたい」という思いが中心でしたが、学びを進める中で、情報はただ正しく伝えるだけではなく、届かないことに気づきました。

現在は、PRや出版なども含め、「どうすれば伝わるのか」という視点でメディアを考えるようになり、媒体ごとの特性を踏まえて伝え方を工夫することの重要性を意識するようになりました。

4. 学びを今後の人生の中でどう活かす？

将来は出版で編集者として働きたいと考えています。新聞学科で学んできた「伝え方を工夫する」という視点は、編集の仕事と強く結びついていると感じています。

小説や雑誌、インタビューなど、媒体によって伝え方は大きく変わりますが、どの形でであっても「どうすればより伝わるのか」を考え続けることが重要だと思っています。

また、出版業界が変化している中で、SNSなど新しいメディアも含めて、どのように情報を届けたいのか、授業でこれまでにない学び方に触れたら、学科内外で新しいことに挑戦しやすい環境に身を置く中で、その抵抗感が少しずつ薄れていきました。

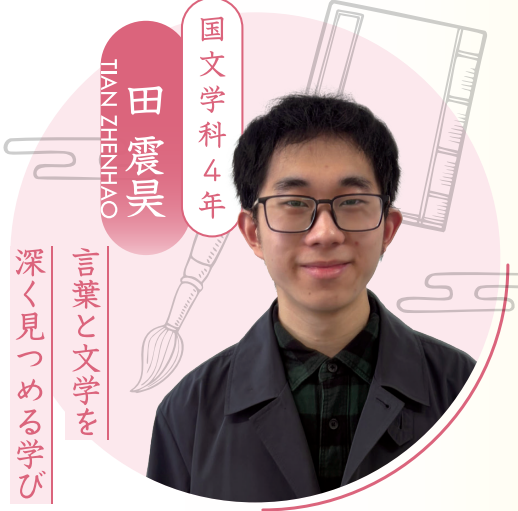
実際に、留学生サポートの活動や学科のガイダンス企画のリーダー、サクルの立ち上げなど、これまでなら踏み出せなかったことにも挑戦できるようになりました。まだ完全に「失敗を恐れない」と言い切れるわけではありませんが、少しずつ挑戦することへのハードルが下がり、自分の中で行動の幅が広がっていると感じています。

4. 学びを今後の人生の中でどう活かす？

キャリアで大学で学んでいきたいと考えています。AIや翻訳技術が発達する中で、単に言葉を置き換えるだけの翻訳はますます自動化されていくと思います。だからこそ、人間だからこそ感じるニュアンスや感情を伝えるコミュニケーション、語学力を活かしていきたいです。

また、大学生活を通して身につけた「新しいことに挑戦する姿勢」も、今後の人生の軸にしていきたいと考えています。実際に挑戦を重ねる中で、忙しさを大変さはあるものの、それ以上に日々の学びや刺激を強く実感しています。

これからも、自分にとって新しい環境や経験を恐れずに選んでいることで、自分自身の可能性を広げていきたいです。



国文学科 4年

田 震昊
TIAN ZHENHAO

言葉と文学を
深く見つめる学び

1. 学科を選んだきっかけ

日本語を学び始めた高校1年生の頃から、特にひらがなに強い興味を持っていました。学習を進める中でより純粋な「かな文学」、特に中古文学を深く学びたいと考えたようになり、志望しました。

上智大学の国文学科では、1年生からくずし字の読解を学ぶことができ、さらに古典文学講読の授業では変体仮名や写本の読解にも取り組むことができます。古典の原典に直接向き合える環境に魅力を感じ、この学科を選びました。

2. うちの学科のここがスゴイ！

くずし字や古本本の読解を実際に行える点は、国文学科ならではの大きな魅力だと思います。授業では、まだ十分に読解解がれていない写本を自分で翻字し、語句の用例を調べながら注釈をつけていく作業を行います。

既存の解説をなぞるのではなく、原典から自分で読み解いていく経験は、日常生活ではなかなか得られないものです。こうした演習を通して、古典を多角的に理解する力が身につく。「文学を読む」という行為の奥深さを実感しています。

3. 学びを通して自分の中に起こった変化

最も大きな変化は「言語の捉え方」が変わったことです。これまで言語を情報伝達のための道具として考えていましたが、国文学の学びを通して、言葉にはそれ以上の重みがあると感じるようになりました。

例えば、日本語の助詞「は」と「が」の違いは、意味が伝われば気になくてもよいと言われることもありますが、実際にはその使い分けには深い意味があり、考え続ける価値のある問題だと実感しました。外国語であっても、単に伝えればよいのではなく、相手にどう自然と心地よい表現を選ぶことが大切だと考えるようになり、言葉に対する向き合い方が大きく変わりました。

4. 学びを今後の人生の中でどう活かす？

将来的には大学院への進学を考えていますが、その先の進路に関わらず、国文学で培った力は活かしていきたいと考えています。古典文学の読解を通して身につけた、膨大な資料から根拠を見つけ出し、論理的に解釈する力は、複雑な課題に向き合う上でも役立つものだと感じています。また、日常的に使っている言葉について深く考える経験は、社会に出てからはなかなか得られない貴重なものです。

言葉は人の考えや感情の表れでもあるため、言語を見つめ直すことは、自分自身を理解することにもつながります。こうした学びを通して得た視点を、今後の人生の中でも大切にしていきたいと考えています。

ドイツ文学科 4年

山田 莉那
RINA YAMADA



自分の言葉で誰かに
影響を与えるということ

1. 学科を選んだきっかけ

高校時代、英語圏への留学を予定していましたが、コロナ禍の影響で現地に行くことができず、オンラインでさまざまな国の学生と交流した機会がありました。その中でドイツの学生と交流した際、アンネ・フ

ランクに関するテーマを通して、日本とドイツの平和教育の違いに強い関心を持ちました。そこからドイツについて調べる中で、文学や言語、産業など、さまざまな面でも日本との共通点や違いがあることを知り、興味が広がっていました。もともと知らなかったドイツ文学にも触れることで、より深く学びたいと思い、ドイツ文学科を選びました。

2. うちの学科のここがスゴイ！

ドイツ文学科の魅力は、少人数でしっかりと語学を学べる環境にあると思います。ドイツ語の授業は、一クラスの数人が比較的小さく、先生との距離も近いので、一人ひとりが発言する機会が多く、丁寧に指導してもらえます。

また、授業だけでなく、課題やテストを通して継続的に学習する仕組みが整っており、「しっかりと言語を身につける」という意識が自然と身につく環境だと感じています。大学に対して持っていた「放任的」というイメージとは違い、きめ細かく学びを支えてくれる点が印象的でした。

3. 学びを通して自分の中に起こった変化

言葉を丁寧に扱うことの大切さに気づいたことが大きな変化です。文学作品を読む中で、言葉一つで人の気持ちが大きく動くことを実感しました。それは同時に、自分が日常で使っている言葉についても、これまで意識していなかったことに気づきました。自分の発する言葉が、相手の気持ちに影響を与えるということを意識するようになり、言葉を選ぶことの重要性を強く感じるようになりました。

また、文学や芸術を学ぶことは直接的な職業に結びつくことは少ないと感じていましたが、そうした学びがあるからこそ、自分の価値観や表現力が豊かになり、人生そのものを深めるものだと思えるようになりました。

4. 学びを今後の人生の中でどう活かす？

将来は高校の教員を目指しており、特に通信制高校での教育に関心があります。大学で学んだ「言葉を大切に使う姿勢」「相手と伝えるように工夫する力」を活かし、生徒一人ひとりに寄り添った指導ができる教員になりたいと考えています。

また、ドイツ文学科での学びを通して、異文化への関心や価値観の広がりを実感しました。そうした経験をもとに、悩んでいる高校生や、自分を変えたいと思っている生徒に対して、新しい一歩を踏み出すきっかけを与えられるような存在になりたいと考えています。

Japanese Literature